



「シン・エッセイ」

凝縮・出町柳

みやくら

大学生になり時間に余裕が出てきたため、先日「一人でぶらぶらしの会」を独自に発足した。記念すべき第一回は京都の出町柳周辺である。恵文社という本屋さんを父におすすめされたので行ってきたのだが、思ったより人が多く店内も狭かったので物理的に細くなりながら本棚を眺めた。普通の本屋さんに置いてあるようなしつかり製本されたものだけでなく、自費出版っぽい薄い本もあって、ほおと思いつながらページをめくった。こんな本のスタイルは見たことがなくワクワクしたので、こういう本ばかり集めた書店が他にもあったら誰か教えてほしい。

本屋を出た後、不思議な引力に引っ張られて気づいた頃にはラーメン屋さんの列に並んでいた。列は進みそうで進まなかった。本屋さんにいる間、雨がザザザ！と降ったのでお陰で外は湿気だらけで、お腹も空いたし一人だし、スマホの画面をスクロールしたりぼーっとしたりして時間を潰した。そのラーメン屋さんはちょっと変わっていて、お品書きの一つに「ギフト」と書いてあった。確かに、お店からすればラーメンはある種のギフトなので、言い得て妙である。関係ないが、一部の人は麺類を食べるとき音を立てずに食べることができる人もいるので、全人類音を立てずに食べるようにしてほしい。音を立てない方が忍者っぽくてカッコいいからである。

そんなこんなで醤油ラーメンを一人で食べた。並んだ時間より食べた時間のほうがずっと短いように感じた。タイパは良いとはいえないが、お腹がいっぱいになって幸せを得たので気にしない。学割を使うため学生証を店員さんに提示したが、提示時間かなり短く、これがもし偽学生証だとしてもばれないのではないかと考えがよぎった。あいにく私が持っていたのは本物なので、提示時間が長くても偽物だと怪しまれることはない。

黙々と、出町柳の駅まで歩いた。お手洗いにきたくてコンビニに立ち寄ったが、鍵を貸し出す方式になっていて、「トイレの鍵借ります」の一言を店員さんというのが手間だと思って

そつとコンビニを出た。決して、恥ずかしかったからではない。私にだってできないことはたくさんある。伸び代だと、変に自分を説得させて駅まで急いだ。

言うまでもなく昼下がりには馬鹿みたいに暑くて、日陰を求めて反対側の道路に渡ったら元々いた道路沿いに気になるお店を見つけてしまい、横断歩道を渡ってしまったことを悔やんだ。道のどっちかしかな歩けないなんて、人間もまだまだだ。もし首がみょーんと伸びたら、体は日陰の中に居つつ向こう側のお店を間近で見ることができる。でも首を伸ばしてしまうと車の通行の邪魔になり、道路交通法に違反しそうなので、やめる。

気が付けば叡山電鉄の踏切まで来ていた。路面電車が京都にあることを知らなかったのから、無知の知だなと思う。余談だが、知らないことを知ったとき、新しく知ったことを吸収すると同時に、「私はそれを知らなかった」ということも一回に一回ぐらいの確率で自覚するようになっている。チャットGPTに質問して返答が返ってきた時も、「無知の知やわ」と言う。「知らないことに気づける人が一番深く学べる人」と褒められた。「無知の知」はメリットしかない。付け加えると、「無知の知」という日本語の音が面白くて使っている節はある。ひらがなにしたら「むちのち」である。擬態語みたいで、変な感じだ。

引き続き出町柳駅に向かっている途中、「ハイ」と声をかけられた。声をかけてきたのは日本人ではなかった。

「どこからきたの？」と聞かれたがこっちのセリフである。見るからに顔の彫りは深く、日本語はほんの少しカタコトだ。出身国を聞きたい気持ちはあったが、あえて何も聞かないことで彼の「出身国聞かれ疲れ」発症を回避することにした。情報のやり取りとしてはバランスが悪いが、「初対面の外国人に対する好感度上げ」を重視したのだ。そうはいっても怪しいので、松ヶ崎という駅から歩いてきたと短く返事をした。

彼の質問は1つに留まらず、午前中に訪れていた場所、名前、出身大学などかなり踏み込まれることとなった。日本人ならほぼ確定で不審者である。ただ、ポロポロと返事をしてしまったのは彼が外国人で、フレンドリーな雰囲気を感じていたからだ。決して私が危機管理能力の低い人間とかでは、ない。

彼は、私が午前中に古本屋さんに行った話を聞いて古本に興味を持っていると判断したのか、話題はその日下鴨神社で行われていた古本市に変わった。「僕は午前中に行ってきた」と言って古本市の写真を見せた後に、下鴨神社への道筋まで、時々立ち止まっては方面を指差しながら教えてくれた。本当はその日古本市が下鴨神社で行われていることも、下鴨神社の場所も知っていた。でも彼の親切な心に触れるためにへえそうなんですわと知らないふりをした。

一通り話した後、お互いの目的地である出町柳駅が近づいてきた頃には彼は私の隣をピタリと歩くのではなく、前をスタスタと歩いていた。思ったより執拗に話しかけてこなかったあ

たり、やっぱりただの話し相手が欲しかっただけなのだろう。彼には、私の目的地は出町柳駅だと言ったが詳細には駅のトイレである。しかし、彼に熱心に勧められた古本市に行かない素振りを見せることもできないため、数分前に「じゃあ古本市行ってみます」と答えてしまった。走って彼の前を通り過ぎて駅のお手洗いに駆け込みたい気持ちをグツと堪えて、数分前の発言通りに動くべく下鴨神社へと行き先を変えた。別れた後、下鴨神社のお手洗いを借りるだけ借りて結局古本市には行かなかったが、妙に記憶に残る出来事だった。

出町柳の商店街は思ったより昭和が漂っていて、小さいながらも活気のある場所だった。親がお勧めしていた映画館に入ると、こぢんまりとした館内とは裏腹に人がいっぱいいた。乗りに乗れない人が『5』に行つて雰囲気だけ体感して帰ってくるようなノリで、私もその映画館の雰囲気だけ味わつて外に出た。

また、ここでも本などの古い資料を売っているお店がいくつかあった。一番目を引いたのは観光地で販売されていたであろうポストカード集。「越中のふるさと 五箇山」と「総天然色 観光の四国」と書かれたものを即決で購入した。なんと言つたつて、今はもうあまり見ることがない、昭和独特の文字デザインとフルカラーでも画質がいいとはいえない写真。外側の箱には茶色い染みがついている。五箇山の方のポストカードの裏面には、80円切手を貼るスペースがあった。調べてみたところ、ポストカードを30円で送れたのは1976年から1984年ほど。枚数が減っているので、当時の持ち主は何枚か使つて友人等に送つたのだろう。事情があつて再度売りに出されたポストカード集。それが今、私の手元にある。ポストカード自身もちよつとした旅を長年し続けているので、この30年ぐらい何を見てきたのかちよつと聞きたくなつた。

現在、そのポストカードにある景色や人々の暮らし・文化が全て残っているかどうかはわからない。誰しも昔に足を踏み入れることはできないが、ポストカードたちは、ただ確かにその時そこにあつた景色を見せて、ほんの少しその場にいるような気持ちにさせる。存在しない記憶が作られたみたいで、楽しい。

外は雨が降りそうで、お昼ご飯が遅かつたこともあり、おしゃれなカフェでスイーツを食べることを早々に諦めた。「一人でぶらぶらしようの会」の一回目の活動としては濃いものだったなとぼんやり考えながら帰路に着いたのだった。